

中間市におけるイベントを通じたシビックプライド醸成に資する実践研究

氏 名 富田 誠二

指導教員 松永 裕己

要旨

筆者のふるさと中間市は他の地方都市と同様に多くの社会課題を抱えている。人口減少がまちの活力を奪うだけでなく、地域の未来に対する希望を失わせている。こうした状況を改善するには、行政だけではなく、住民や企業が一体となった取り組みが不可欠である。では、住民に当事者として地域の課題を捉えてもらうにはどうしたらいいのだろうか。本稿で注目するのはシビックプライドである。シビックプライドは直接的には人々の心の持ちようであり、そこに直接働きかけることは難しい。しかし、シビックプライドを醸成する仕組みはデザインすることができるだろう。本稿では、シビックプライド醸成の仕組みを実践し、参加者の変化を検証することで、成果、課題を洗い出すことを目的とする。

本研究では、市民が集い、連携し、体験し、活動していく過程で共感が生まれ、帰属意識と当事者意識が高まり、主体的な行動へとつながるという仮説を立て、それを実証するためのイベントの実施と参加者の変化を探るアンケート調査を行った。具体的には中間市の市民団体から参加者を募り、約3ヶ月にわたって市民体育祭の企画から実施までを担ってもらい、事前事後アンケートで変化を探った。

その結果、イベントの事前と事後では、参加者の地域に対する誇りが59ポイント増加し、当事者意識も37ポイント上昇した。また他の団体が行っている地域活動の認知度も51ポイント上昇した。さらに今後の地域活動については、参加者全員が自ら行動するという意欲を見せる結果となった。この変化をもたらした要因としては、企画会議における心理的安全性の確保や目標の共有、ふりかえりとリフレクションの明確な設定にあると推測される。また、仲間との交流を深めたことが、他団体の活動を認識し、ともに地域づくりに貢献しようという意識を高めた。ゴールの設定から共有し、それに向けて具体的なタスクを実行することによって、自分自身の存在意義を感じ、達成感を味わうことができる。それが主体性と当事者意識につながる。シビックプライドの醸成に当たっては、こうした人の巻き込み方のデザインが重要である。